



研究部HP 版

第 11 版 教育研究部 令和3年1月発行

(文責:細井)

～ 状況にそぐわない行動 ～

1 はじめに

「食器棚をたたきガラスを割った」「支援員の腕に噛みついた」「CDラジカセを壁にぶつけて壊した」「利用者の頭をたたいた」

上に挙げたものは、本校を卒業して現在 23 歳になる H さんの、現在通っている施設からの連絡帳に書かれていたものです。これらの一連の行動を皆さんは何といいますか？一般的には「問題行動」ということが多いのではないのでしょうか。

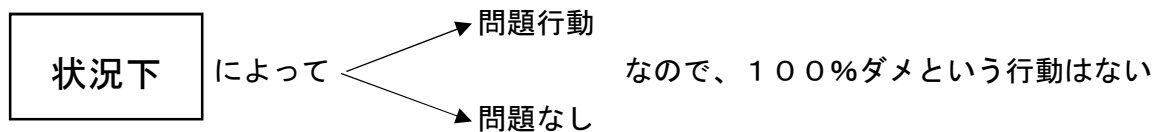
さて、今回から応用行動分析的な視点を踏まえて「問題行動」を見ていきたいと思います。

2 状況と行動

応用行動分析的には、「行動として絶対にしてはいけない行動は存在しない」そうです。違う言い方をすると「その行動がでもよい状況下は必ずある」ということです。したがって、ある行動そのものではなく、状況によって問題行動となるか、ならないかに分けられ、状況によって問題となっている行動を「状況にそぐわない行動」といいます。



例えば、「大声で叫ぶ」という行動でみてみましょう。「図書館で人の名前を大声で叫ぶ」という行動は、皆さんおわかりのように明らかに「状況にそぐわない行動」ですよね。では、「コンサート会場でミュージシャンの名前を大声で叫ぶ」「野球場で選手の名前を大声で叫ぶ」という行動はどうでしょうか。実際に経験された方も多いと思いますが、その際、注意されたことなどはなかったのではないかと思います。つまり、「問題なし」です。しかし、現在のコロナ禍という状況下では、「コンサート会場でミュージシャンの名前を大声で叫ぶ」「野球場で選手の名前を大声で叫ぶ」も「状況にそぐわない行動」になりますよね。



では、「状況にそぐわない行動」をまとめます。

状況にそぐわない行動

- ・ 不適切な場所や時間帯で起こり、長すぎたり、弱すぎたり、強すぎたりする行動。
- ・ 行動は、状況によって不適切かどうかを判断する。

※これ以降、この互版では「状況にそぐわない行動」＝「問題行動」としてみていきます

ですから、行動（例えば、つばを吐く、たたくなど）だけみるのではなく、どういう状況下で、その行動がでるのか、ということをみていくことが重要になります。なぜならば、状況下をみていくことで、その行動の機能（「メッセージ」といってもいいかもしれません）を知り、問題行動の深層がみえてくるからです。

「泣く」という行動があったとします。

- 1 子どもが買い物に行き、おもちゃの前で「泣く」。
- 2 子どもが虫歯治療のため連れて行った病院の前で「泣く」。
- 3 子どもが走っていて転んで膝を強く打ち「泣く」。



さて、この1～3の状況下で起こった「泣く」。子どもはなぜ泣いているのか、すなわち行動の機能は同じでしょうか、それとも違うでしょうか。次回は「行動の機能」についてみていきます。

【1月発行第12版に続く】